一 別當ときこえし人々の中に二条の帥（長實）と申しける人
みつから清くゆかしと人の筆さまをも論をも見えしか
かゝることは御覧じ調をいくしてあしき物のまじりけるを
えらればこそとまるへくもあしき物まじれ大師は
しらぬひそ清書し給ひしより其勞をなさん
其のまゝ白河院に清書し申し給ひける御文我のさ
なくさ清くしめんとしけるもれなくと申しとあ
紫々の清くあそばしも不便宜と申されけるを
なり二三年にて後拝年々のちけるに帥出ことを
深のまことに申しめ筆ならぬもしより院の御前の

わさもとは御前にかゝる清書のまゝ後拝賀にて度々打
られつゝそこにてとくふあるまじき清書ひとよりこ文
帥思ひのほかに拝任ありてされば清くゆゆしとぞ
見侍りし二人とも清書をしたりしにせむかし清々れ
此たる物やられこう様やとはあふ清く清書
まことにいと々も度拝仕やう一とのかくもよき文候
左こりとのまことによくみなれしてそのかくもこそ
こと人も清々の御こと人こうこまことにくちをしく
おひたくるかたこの文人をひとりおのうとて
一 御もとに入道殿（忠實）に後拝賀の日のかゝきこえ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

一　とも来りて歌つくまつりけるにかこ哥になり
て
　世中ハ憂身にそへるかもをかれやらひすつ[illegible]とかれさり
此哥をうたひたりけまた後頼いたりはよきりあと
てゐたりけるなんいみよりけるに永縁僧正この
事をはたへさしてうしやみくるは法師とも
かたひくさ[illegible]物とも[illegible]せなとして我よ[illegible]
[illegible]いつも神[illegible]れらこそすまとしいふ歌をさて
[illegible]をけまた時の人[illegible]
[illegible]人となんいふなる今は敦頼入道又是を守て

うらふしくやらんなん物もとらせすしてめくらとも
ふうらみくとせてこめ来てこのをさまはよの人こそ
[illegible]てわらはまこゝろとそ
一　法性寺殿（忠通）に[illegible]後頼卿に来りたり
[illegible]蓮昌から[illegible]て哥よみあく[illegible]
[illegible]こに名をかきりけまは[illegible]
うらしはふ[illegible]名はいふ[illegible]
[illegible]
　卯花[illegible]
[illegible]

きはめて歳したりける屋殿さうを拾ひこぬ
然して御論していみしうきう聞させ拾ひ
かの三首の歌を歌ひ川まよこたりかんんく
をまはる屋に海さりてこれ侍ま

一 五条三位入道談云うれこそ廿五（保延四）なりし時
基俊の弟子になるむとて和泉お国を領とか
うたちにくかの車にあひけりて基俊のいへま
行むかひそうるのありきかの人それ時八十
五れ里うれ東八月十五夜にて御人ありし
かくこ亭主のことにきうに入て我のよるとうふ

かうれ杖とくとういつかれ月をまんく
空拾しくなるめいてそれそりしかく是を拾く
歳みつ屋とうて天とあるさうむ
と川をたるとなるの詠しもとも歳いこし
う歳をし拾きにはくれとうふ物語してひさし
宇右よりゐていまの世の人の有拾なとも云し
里拾へまとこの御詠とうきの志里たる人まは
いむそうそこ問ましかく九条大納言（伊通大臣）中院
大臣（雅定）なりとこれ拾ハ人とは思ひく侍め
拾ことやしかくあふいとしとて云ふ歳たるき

て面とこるくはうはまとそうしかやうに師教の類
とはやうありしかとよみ口まゐりてハ後頼あは
及ゆへくもあらはは後頼ハ屋んことはさ人也とそ
一 或人云碁後ハ後頼とハ敷虻の人とてさハいへとも
こ面のこゝろ行ってこそあらめといふれかまは後頼
そかつりきこて文時朝綱よこたる秀頼ふしこ
川称つゝゆきゝ能里そなか秀句ありしとそいふれかる
一 雲居寺の刻里のまとにて秋の芳のみと後頼
朝臣
明ぬとも猶秋をのしきる給て秋へのかしきに面かりすか

名をかくしたりけまことも是をとさよとんえて碁後
いとむ人まて雑していくいつまも頼をしり秋句の
もしまて文字すへはるにたるしこさ事なし
はらへさくいとしくおくあくさ物なりとくらあ
うはあくもあく雑をしれかまとも後頼ハ此こも
かくもいくまさりまをりこそ屋ハいせのさこと琳喧人
一 うゐるまかりれんこの拙なる證ふこそ一門お
ゐるん侍まといふいてそりけまはいでくうを
くあきのんよもことよりしを頼るあしとうな
はくはちる本れしこ風ハさむまして

とけてれてみ字をたなくくとたるめたるしいろ
まさくとになりてそのもいろすうろ（さしイ）ふさたりかる
とれは後頼朝臣思ひやられましひけるとそ
一　琳兵と喜後となるのあしかりをまはさまく
夜毎と思ひくあるか時後撰の哥の中に人もいとし
ら寸耳なれかさり世首をえり出して書はるひ
さくかの人若さへもていふかりさに人のこと
やうれる歌合をしてからまけとさしんとすつゝ
三年始のしんとて云いてそりけるは是をまんて
後撰のかとつゝましふつとしらひよくすとふ海

小やうく難をしれたりかるをさしかしこふまてあり
まて左衛門佐まあるかゝぬまはなしつゝれ女人
よくさしひもそのなし寸あくれ上古にもすくれ
始つる歌仙のかこ続みてさまへとて特勝しけるを
たまんるへいみしうつゝひのり基後かつさて
やまかしす地にのまはれもかひなりまかり
一　後恵云法性寺殿まて哥合ありけるに後頼基
後ふるまに判者まて名をかくすして当座に
判しかるに後頼歌より
口利やをのかくまたまひしろもしふ人にはみえかるものと

見と素俊鶴とくらべてそのハ淺くてそ次ゆ雲ゐ
ほすむ事やハあると雖してまけまけしてかり
されと俊頼この度まてこと紫もくりつとうれ時
夜下こゝろひの判のことくとのゝ書てるゝを
よと故仰かるとさ所ん俊頼朝臣見ハ鶴にあ
夜長龍たりかのたまふしとうやうそのとこむと
思つる心さし深かるまけるまよりまかりためり
歌まてみてたりしてのれ侍しとよめる所望と
所ゆそ学ぶ学ぶ素俊弘戈の人なまてと思ひ
はるまもれくへのことと雖すらくせの仰かれも

ことにしまて失れ侍くそ有るか

一 或人女のもとよりまみをえてりそのふこに云
二首ありしまへしそ給りをよとあつる
へ仰をみまは此分ニそれうちとれ無の分
たり返しとすつきにもあらすいはせ面しとも
めるを見してそれいくらかしさんにかるつる
ある哥二首をすんをしへてかをそ仰しこ
のことをある古きに人にかたり侍しかハいみしき
ことなるまを首色このこれまさとものこそし
まるわきれりしらぬとしかひそうる性

事にはかるひそうはれることなりしとかんし遊

一 勝命談云 結るへきに所なきにて無心なる女房
おこの歌よみけるをたる世術にて多くなりしそれにあ
実のある也先ゝ此ぬよしにそ夜おかめさ
して寝ことふされハのちにくちさしひこ事
さしかまもいくまを見とあつゝふ所とまかへし思
事たまはいなよみえつ面くもはやう
ておかめさてやこめるはらの事也又なさ言
法人人まもあまはるへきさ結さる女なのそ
極おとなつかて歳ことも志ぬ骨の一番白な

紫いひ来るることありしもしらんたゝはいふもいひ
法人し志ぬ事なるハそしよもはかさ
結しなとこらいひてすへしこまはいつとよも
あるかぬ事也深くさひそといふ人まも宝し門
夜しとつふ人まもなのつゝ通用しつへし心つ
如さよしいひるゝんまて四を屋りまたるやうな
新へかれとおまてもはまてるたくふまよいぬを
ふさ海ふもたるへきれり

一 或人云たるかこの志もふそつるとつふ所ありそ
こふ猿丸太夫の墓有庄のさらひまて其ことは券に

かきのせてもてみかの所知なり

一 志賀の郡に大道ある是よりすこし入て山陰に
黒ぬし明神と申かたいはすこれはむかしの黒ぬし
神とな待るかなり

一 又ミむろとのおくに廿餘町いりて山中へ入てう
ち山の表撰うすみなる江ありいへはなけまて堂
の石すへさてうにあり是なとかなすすく弱
てきにつき事也

一 或人宮内卿ある賀朝臣時の為に人七八人あひ
伴ひて大和国うつくさのかたへ極山に行ことあり

かりこそ名にあるかに河まこゆ大なる堂あり
やうみ有けれ今えけまたあやしくてうれ名とあふ
人ことにとひき待ひ此ある人もわかりまたりかる
あひさにこのみ鬢志ろくおいたに翁りとりあ
ふなり是りしも屋うあらんとて弱けまは是
そ此ようれなとゆとつ人にいけこき事也と返
かつ其感して待るもてもしそれへんに志力
く井といふなやあれとこふ皆あきてあるも後
待まて江ハ今に待るとて堂のにしに幾程忘
さしぬるとに行てとしへられハ人にきうに入て

一反とはまことにまふすれしかそのことく相子
けりに是を猶合てうち屋をめつて二反の始よ
里宮殿のしくまふ也其のまゆすゝひハそうハぬ
半臂の白れんすの歌と云ことをさしてめて
そ起とはとのつゝ殿ゝよつるれるへしかよりて
志らけるん人ハなんてこうおもひまゝん哥の
ことく無字をとゝ得て思ふそうそうまゝハ殊に無事
事也けまはそかうとはさんひの白有舞と云
この歌をは誓うゝ御ことにもいふてむ未し
一後恵云殿ハ秀白と思ひえる結と和朱いひまへ

ふことのかゝ起すり後徳大寺左大臣歌より
かこの海の霧のまよりわれもまは入日を洗ふ沖つ白
頼政卿云ひてし
住吉の松のこ海よりかゝもまは月落かゝる漁舟山
其の毒首ことに上の白思ふ相なるぬうこしたり入日
をあらぬといひ月おらかゝ殿なといつるいみさき詞
なまてとむきこしの白をはえいひまつと光恨の
おとかり
一二条中将 特経 読云 歌すは此もしのなくも来れ
と此月ゆることの有也 無資といふものゝ愛なり

月ハ志るや憂世中のさるれ給ふめてもこ又幾めくとり
是よろしく詠るふこりてよの中れなりといふ二字の
いみしうわろさ給りたるうれよれくるれさとといへ
海ゐしさるまゝ又秋ぬ人ゐ
淀のあるの目の光にまこ想(ヨイ)そ渡るあさ沼の喜れさ
是も光ゐまといふこれしのまろさ也月ふよこ想(ヨイ)(むけさ)
てくとあらハ今すこし想らくしを笑ゆへさ也この
こと紫とは宮の中のこさすとやいふ亀るんふ
くおもひいまさらん人ハまれまへあるこし
覺人盛法師ゐいくく宮ハあらくしくこめもあくね

屋うれる一のすゝこなりそれとあまりまさいふみく
とかく浮まはくてにくまれくこのめりしより
清ふ前さへらせくなにてもなれものよなるなり
とやこさはれとさこも季師ゐ宮ゐ
年と稱てかへしもやらぬ小山田ふ(ヤイ)ゐまくすへもあらし
このまゝ都なる和(ヤイ)こ想なけまとつふしいひくさる
ていの宮とみてまへしと年稱てかの集の中ま
紗とみまは
紗の男らかへしも屋うぬとやまこれさのこいりたるをとへ
是ハなれられ給りけるやいみしうまをとりて是

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

しとへの六歳のもとおのかぬとおもしれりもの
さひ（ひろ）なる所とはそしよのつゆにいひなすつこ縁
いさくあんしをくしつまはのつりてみこころ
とおる也あるへいとゝよかにいくけるによるん
ぬよりますくしけまはなしとおろかさしまて
とよくくらぬと上手といへし風情をとのつ
夜いくくるそのなまはなるを問ことあ
うはことも あまてしかやうれてしにまはくそれを
ちめはこゆるわりけまはあを歌まこれ秀句を
はおりくたらぬことにてちれうかし

一 静縁法師 男つゝ夜ゝ宮とかたりていくく
麻の言を守ふ我さへかかまぬるそれ唐に侍りかり
とこれ法うまつりて侍まし見めり侍といふ事云
よろしく侍り但しあれぬるといふ詞こそあまの
方をすれくいるよそや守えたまていふと静縁
云云詞とこそこの分は詞とは思ふ拾ふるに此報
よ拝のかよ思ふ侍ていとしくわろく難す
ぬ思ふ事まてけりぬよしれく思ゆるまこれ
物といひくんとへかりけるものとし悔しく思
ふりとも十日つりかりてみまそ云拾一日此分

難しのめりとかくおもふまじく思ふまゝにゆへて
いみじくかしく見えて候しまゐれさほどいかにも丈
夫の詠に侍ることそ我らの事とおもへり人
のあしくよみ人 侍らるとも好しめと思ひて
給て侍りし手本とて此屏風の歌どもを歌よ
よみそこなひたるとは何ゆゑぞ侍ける人の
詠やともかくもぬれめる神て侍しされはこく難
しのひたる我あしく候詠るの歌ぞとこそ
思やにまいて見るなりといひて此侍りける人の
一 こそよ候こそみ目かくく侍りし

一 俊恵法師申ては故左京大夫顕輔卿まで云俊頼
卿の庶の子件にて
父俊頼は給て侍しと今はそれ劣らんずと思ひ給へ
あまり我給ひて思ふこの金葉集よは
給しよの事しと申歌さらん思ふ人てもあるまじきと
見とすべき歌ども我えつる詞花集よは
云人々めかくとおけさにてさすがの歌しは
其の歌とかのたえひまさんとおもひ思ひ給へるにとこの
まで侍ても かならんもしくはあるまじきと侍まていく
詠めり云ある我俊恵の歌苑抄の歌これて

一夜とてさかまして床の小道にて花ても花の積ぬる所
是となんおりて夢とおもひ入給へるいつ侍らんとせ
いま是等まんなく新ちちをとこれは我なくすく
花ぞうる夢三首三四いつまつ花口さかしみちの
人丁定之
示くてさいと花や沼いてうふ祢ぬこの月の新とのこえて
新人の夜はかもれくてやこれまつる神ようる花は上風
帰るさの物とや人のなりしんよの夜なりの有明有
後恵云顕輔卿歌也
多くみく現のうひはなけましともいつれさ夢そ花也なる

此夢我後新胡良歳して云是はむくれくみるさし
てくるあつらふける夢也よのつきの人なるはうつ
のかひはなけましとも也くれさ夢そ焼しなりける
いさよりしし後はいくよまんとくほめ歳をれる
一後恵に和夢此師老の教ひ侍しはしめ此三葉
に云夢はさらめらかなりの侍なりの我とまこれ
師とたのまれは此夢をたゞ色夜るれうこはかなり
夢来此世の歌仙まていまそかるへこさこへまゝや
うの教をなさるれはや仙たものあるかしいく
我人よはるけるし後まれ学ぶり先絶得し

て我ハさきにしたる歌よみ給ふる様也く
ある海しさこと也其故ハ後国たちの杉ゝハ左
右なきまたりにくいまもしかしそれ故実かく
高慢にしてく今ハよみ口後手ふなり給へりその
かゝ前大納言朝ゝ等恵し此道と執しへと恥て
みるさたてあるし時のよゝれゝハとハ肩となふ
ふ人まくれかゝ海しと乗いたりにすまとて此ゝろ
よ面新ゝ等ハおしも思ひ意いまに風ゝ心つきな
さ詞打まをたまたなのまよりてゝ秀哥もいてこん
秀逸なけまは又人もちひ其歌ハ当座ようなし

人かゝによりてゝくもあしくも等ゆまてゝ後朝ま
と一度つままれるゝ心ハさはいふてゝ風情もて
まの姿も深かとなる歌ゝそまんとしハ侍まゝ
く等ゆまはをこのあめしなれと後画よこの此
意ゝ和心のことく等と楽し侍り又我心をゝ
けさにしてくあやしを祈と人の詠めもそしまゝ
もする我もちゆるの是ハ古さ人の義侍しる
なり此るゝとたもて新しるしにやさ深かに老そ
すまてゝ後画我よみ口なら深とゝ中人ハ有紀そ
和し海ゝくこと事にあらす此故実をあやま

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

群書類從

二百九十四下

東京圖書館
和書門
叢書類
二四函
六架
七號
六六六冊

127
666
1

370

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

東京都立中央図書館 TOKIO LIBRARY

明治八年文部省交付

羣書類從卷第二百九十四下

檢校保己一集

和歌部百四十九 雜十四

無名秘抄（イ无）

後成入道物語事

後來自讃歌事

道因哥志深事

具親哥と不入心事

近代哥所事

諸浪名事

鴨長明

清獨弘才事

後成清獨判偏頗事

隆信定長一雙事

式部赤深勝劣事

縱名序事

あさりいさり差別事

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

取名所様事
取古哥事
五月かつこふく夏
為仲こやさせ萩堀上る
頼實数寄事
業平本為事
小野とはいくしはるの
とこ孫乃事

一　五条三位入道云後恵ハ当世の上手なりされと
後教ハ様をよひかたし後教ハ思ひいこゝぬ
くゆなく一手にて行すよ先ハ行ちうゑとよい
ぬなりとは世ハ頼政こそいこしこさ上手なれ
手続きに座にあれハめれかもこれてことゑとうを
後ハ事ハ様ゆるれり後恵云頼政ハいこし

手のし頭仙なりんのそこゆく家にたりかゝり
て業に是をやとれ其心ハかけ清く為れ一なる
さ風乃そこと姉くふも海しさく花のちり葉
乃落月ハ入面重ハ行ものの降ハ清もて言
立為起ハ風情をめるさ後といふてほし
識ハ奇頭の出たんもことゝ其ハ行ふ清
かもしは知つさ時の名とあもたる家大ハ
くすけるとうや大きく今ハ座ハ清しなりて
家うち涙しよ紀あしさことゝ是なとせられ
きるもし紀も事りくんまいりきる事と

みえていみしかるしかの人のある庭まては
何事も大人あるかやうに侍し和り

一 勝命云清獨和歌（ゆイ）れ弘才はかゝことをおこふ
ふ人なりしいまゝこよもみをよつまゝしとおもゆる
ことをつさしかよへくまゝめ出て多年庭意と
よりまゆ法し物るされまるおもゝもにくなん侍
しこうたれの言よ面んまてハ大事にいふも古
集をよんくこ世とのひく万葉集をそかつと
う無きそみるまゝ侍し

一 後恵云万葉三位の名のみまとにまゝてたり
し法いてよ此縁の中にも何まつりすくれまりと
おもすよ世人はやうくにさゝめ侍まことそれとは
まちひ侍へうす面さしく承るかんと申し
赤淡

夕されは野人の秋風身にしまて鶴鳴也ふるくさ此里
是をなん身にとりておもふく歌ともひなるといふ
たれしと後恵又いくく世日警く人の中侍へ
面けよ此此姿と先たてし我へさゝぬ家ハ名を
古事紀すなるまゝまるやうに中侍はいふにしきこゝめ
猶はいさよ世にはかりやさゝめ侍るん志ま狩

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

男つかはされの歌にはいむくゝぬへのことをそ
侍しかとかたりて是をとうらくにやしハ来の事
を男にしてとりふらしけるいみしく無念に
おもひゐるわりこれをもかりぬる歌はをしさ
をいひなりしてをくそこに男にしをんかと
思のをたるこれをんにくるもいうにも侍ましいと
しくいひなりてゆきて歌の詮とすつさふしと
さはくといひあらのしをまてむまをもとあ
けくなるまぬるわりとてをはゝ我哥の中にハ
三吉姫こゝ山ず紀くとり雪山まいハ棲屋ハ打付面つ

これをなんかの面をひまをんとおもひなるをし田
の来らぬわりつるわくいふ人もあらハかくこそい
ひしかと語またまへとそ

一　顕昭云此ころ和哥の判ハ後鳥郷清輔朝臣
無左右事也称るとともに偏姫ある判者なる
ことをそそれやうのものなるわり後成の
は我を知ることを御しおもつるかしおもてこと
なんあらかなを世間のなしひなまれはさわくと
をいひなしやうにいくもしさ清輔朝臣ハ和相ハ
いみしく清廉なるやうにく偏姫とつへこと云

し地なと等閑のことにみえたりけるを千載集を
らかまた侍しことはかの人をうきてはちのことなり
なれあとにも作りしもそこに志源なるし者なれ
ことゝ申優して十八首まで入られたりけるを
は曾はうちに来りて風をなりしけるよろこ
ぶといふことゝ給ひたりけれは雅にあはまかりて
いまニ首とくらへ大首になされたりけるとこそ
すれへうるまけるものにこそ

一　ちの法は隆信定長とつかひて若くより人の口に
はなしやうにいくまた侍さかの後通ふべくまて

百首と十首法し十首にはよみて十首の百首をなる
つもたることありけるをとのゝいとみあひてんと
法くしたりけるにいはまともとゝ法りけるを又後
頼人の十首要よ両を給ひる時も雲をにふよくと
みたりけるは系の人はよの人のもとつひとゆ
よしまけと何事かくとおもひてるはなり
これ十首の家にこそ西秋もあひぬへく秋の内
雅とすんいくまたりまたりけるを九条殿右大臣と
申し時人とに百首をめされしに隆信能右大臣
入て事なるうちに日数もれくて物をはしめ

めよ和とりちしてさいくとまへすつこゆ
哥をも大事とをぬとて口利をまゐけそいひ
侍し
御前に朝夕侍し此常にも和歌を御会
ありきし六首の哥に皆すゝことよみつゝ来
れとて春夏はふとく和歌さに秋冬はおそくこ
夜ふ無様はこゝろにやしく清く御つ見せし
おりふ屋うによみ和歌をすゝはうれよしとありの
まゝにやあ家よ哥の大海志まるゝ所をも御覧
すつきためたりと故御守りしかくいみしき

大事にてくかくへは舞退をんふくかゝぬ人をも又
そしよりめされをかゝ見ほまさしく其の所に
御いりまゐらせる人殿下大御区御房宮家家
隆寂蓮帯とかつ六人を侍し愚詠をとく
和歌をしれる哥
雲譲ふ雲川春風はかゝる也高まの山の花さらぬも
打ひつきそ（ゑイ）もなるれん新三卯花月夜葉ふけ行
かそくかゝひ立まる哥
晴れ月の月の極の落もみち照としを和歌の夜
寂しさは程ぬるり詠ける落葉の上のとれ和歌

えんにやさし紀哥

思りよしあるかなかれ人物おもふ神の行ひそねられ
桜花そつ暁のまゝ待よりしきりまし いそや言葉の森
此中に書の哥とあまし詠て寂蓮入道ふみをゆ
さし時たゝ面の哥よしそ然あくれ毎ましこの
よ書てなりて紀まそにあらせられ時まいて
まそく見をさけ(くにイ)ハかの入道の哥におなしく
たゝ面の花とまゝ待そりくる我頭に似たゝ
冬ちかんなくしかんもわくありけれにことは
ら見まるいて有から紀心なるまゝ所ゆるハま

ことの心を面なくしくいく神なるくもいく
待さるましと我えつるみちに如きは思へもよ
くおふなめりそのかゝ宣陽門院の御供花の
御今の哥にさこ夜契久といふ題まてうこ紀な
こさしよのや面とるそしこいらよめるましを或先達
見て我頭ふくそりよみ来へくとあふから
まゆ待しかくちゝ程なくて当度にてよみ
来へてさしたしへなさんなりこ也く人の
徳とおもんとすれなりとも我ため面目ありし
そむ乃事をせこと書ゆるもて待るおり

くされとこのふこれ得分に自讃おとませてこも
いうく侍るん

一或人云後朝髄脳に宮頼中納言公任大納言より
武部と東海博つてをとり面さ皇をとりかふ大納言
云ふさふ古やとも人といふへきにてよめるものの
なりひとつ口ふいふへ(くしあけ)ら次と侍ほけまは中納言
かさ孫ていくく武部の歌まはよ所にてしせ山の
くの月といふ事をとこそ老の人は秀歌といふ侍
侍ていふ大納言いくそれよの人の志ぬ事は後
ひふ(よイ)ふ(ふ)より晴さに入事は經の文なまは

いまふ見をよりきすゑの白は又本にもなりまして
やすくも今面まは如へし志やとも人といふへきに
ふていひくもなりて一種なけまはあしのやへ事紀とい
へるかこ種元夫の母をひよるつきまに侍らす
かこそつ侍るよし侍めまこまふふつの不
寛あ学つ事武部と面さ行るよし志といふ侍
されとその一條の侍るつさ今晴の歌合なと
をみまは東海とおさうまに賞して武部も
さん純人面部とこそかりつまは武部の二首は家
をとまんまはいふ部にてしせといふ歌はこと柴

れとまはまさひら右衛門とをいひ侍ることは
やんことなきこれとなりはて陳よゆかしくそ
歌よむとて前れ事につかてよきちらさ祢とを
こえたるかさりはよりはれさ折ふし乃事も
そ祢こそくつ示しさ口つさにく侍まてゝ
かりかまはその時そ人さ面よきらけ れ
て諸のこゝろもおりしかりこゝろ祢とま
ことふ上手なまは秀歌も如何くさとふ事も
はしゝ知るかくよみをくなりは撰集ゆゑも
しもあまたいまるふこそ曾祢好忠といふ

その人数よもあらん圓融院の子日の御幸に
推集をさへしてをこの名をあらたる物そう
しはまてゝいまは前れ才にくやんことなきは
おほ人里一条院の御時みかゝさりれるを
と江帰志るしたる中にも歌よみは道信実
方長能輔親式部衛門曾祢好忠とその七人
をこそ志るされて侍まこれも人ふしによりて
ゆゑいまるはまはせのおほんもなりけるな
るへしはてかの式部ゝ影まとりてをとり面
さりは三位のことりのいく祢ぬもあらす

さる方もなりけるをなつく人のんはさりけるに
まやれらの人さる無し
一 ある人問云此ころの人の哥れさ面ニ面ニワ是
をより中此ゑ人の歌の神を祝する人のとの
世の謗とはすゝろことのやうにおりひくやゝ是
慶宗なるとつゝ美名とはけて是しまあさ
あれ又この此やうとものむ人の中此の神とは
何まちしまれなしとまゝ面ニ宗論のこ
なひまてことおるへくもあるに未学れをもん
是非しあるひぬへしいふくさしいふある

人菅云是はこのよれ哥仙のおれされる年ひ
なまはをやすくいふ此ことめんをしし人のか
哥ゑ月れしの行度をもさとりをに神の
ゑともをしいふ言のふれのおれつゝれくと
見仙のとよふれと申侍るんゝ又おりはまんり
おてこうゑてことゝいふへしたるこ此事と水火
のことくおりつるかんえ此おれと侍なりすへて
ゑまこさ面よりにことなりむしの文字れのすを
此こまらすとふさ面よくらてしまのをそいひ
くりかの出をやへり此の事のこよりまこ是とも

五句みそもしのうちにつりしにさしこめらまつまな
れと（ハイ）万葉の時までは称んうつなるかゝ仕しを
のつるとうまたくあかうらに姿三葉をえら
はさりけるまやとうんしたり中此古とは此時蘇実
ことにそかりて其さ間よりしにまうまつて
里後撰にはよりしき哥古今にとり法くされ
こゆれらいくれとも見へさりけれは歌えてこく
して姿とはえらのすんとはさとせり拾遺の
うろよりそ其体ことのかにものちくなりて
こゝろ里くされく影まし姿するをれるとよりて

こゝろそのうち後拾遺のとは紀とすこしやうくさて
むしは風と云里なり屋くうは時のふる紀
人なとは是をとうもはけ里ゝるまや後拾遺す
かくと名つもて口拘しきことにしかれとそある
はんを讃里侍し金葉は又わさとおりしから
んとして（和歌イ）輝くなる歌多かり詞花千載大略
後拾遺の風なれへし哥は昔より里侍大里
さて祈るやうかくのことしかれは拾遺より後
うれさ間一けれして久しくなりにゝるゆへり
風情やうくつさ詞よりにあるまて此時ゆし

たるひてをとろへゆく昔ハそこ花をこそにおくへ
月を雨まことを和歌の浦に成ひよするを
却りし起てたせしかと今ハその名いかにして
雲の中にさ雨しの雲の成ふる事水にかりて
称しさいひとそへ縁にこそ知るかことゝぬ
糸やうに安うすたしすこそ却るひとれハ見
つし起ふしハかくくなりゆくまゝしてえたれ
とも昔を雨つくへるこゝろとも有ら称し
くくたけ来る浦るなりいくんや三茶にいる
まそはいひ浦くしてくれハ称しさ詞もなく

めこ雨る雨しも和しさとなる秀逸なるぬハ
七五をよむまそ七とは句ハそ雨ふをしハかりあく
やうれりさに今ハ老の人の号ハさ雨ハ世
によこふるされよくるるのを志りて浦に古風
まかつりて幽玄辞を雨なふことのいて紀そる
なるまこれまよりて中古の有ふまをなふ也
そうらめ我おとろのしてをしまあさける
志り続とも海ハ心さし一川なれく上手ロ
秀歌とはいつくこもそむかすいくゆる清濁
頼政後鳥羽堂道なしとこうよみくりとくと

のせれ人もすてかくとを様すりこの歌の
中にもよくこみつかとは諸家もそしれ
たるすしえを私ともにいたりてハ又いはまも
よりしかしす中ころの作しもなれ哥とを
のよの歌になるへてこれかをそうしゐる人
の中にあまかおよそ御しかまるにこゝろ
すそれ世のいともよみ相をぬ歌ハあるひハ
まへてんえと或ハふくい家よるかくしされ
そ一方に偏執するし紀事ふこそ又同云を
れよの旅とあらしくいて紀をるやうま

思へるハひう事にて紀ふ菅云大のなんハい
まぬまゝ也たゝひあらしくいてきゝゐり
こそもかるすしもわろかるへからぬもろ
まは限ある文旅をにもこゝにあらたまふ
たりこの國の小國にて人の心のとろ
なるまゝにて法のまゝと昔にをゝへしと
ゆるにくこれ侍まして歌の心作しとの人
みをとゝろこはしめむをもなれハ時の人の
覩ひぬまんまるにかまやハ侍つきいかま
いくんやるよくとたゝを出をるるにを

あらまの万葉よりそれにまとしたる此哥とも
をよくしたるまゝなるぬ人の此なんとなする也の
此集の中にさ海しの乃解をしらあまたに中
古乃頭のすゝこゝ古とゝよりまゝ出たり又この
幽玄のさ海も志の集よりおくりまゝ多くひと
の姿をよみ法くして又改る世をしたれ
志と歌なくまてもらさすえらひのをくて
詩く程示の集をはいろへかゝ須見と一向に
耳とくとしひて世しまいやしむるハひとへに
中古此頭乃さ海に對せし給たる事

同云この所乃解いつまつのよそやまとく又秀
頭をもえろへさ菩云中古此解ハ学やを
くして志ゝも秀歌ハかゝる歌風し詞ゆり
て風情くゝ事を詩すへさゆへなりと此解
をおひたくてよくしたつまく詠やすし
うれさ海詠しまたよりすゝことしふかた
まて無あるへさなり同云学ゝ一とく
なるハ何まても此ハよくやろさハまゝ詠まゝ也
学志も又我もくとあらそふいりくして
うれ勝劣をいさしむへさ菩云如勝劣を

のこらハよやそこもわくさはもる紀ことにな
架りけるとおそ後しくこ捨おかし待し
このはまはいのふもさの鶴をんぐ後ことは胃
法あるか人のさうひ手入ゐるを越さんて
れら有へさ事也そ鶴をしたるを
そ岐ふく紀るの多ようまいくんや風情たら
ぬ人のいまこ学まてはかりけるすして匠
はのまふまねひたるけるかこのこいそ紀
ことなりけさうとはすつさてのとしまてあ
風しれ紛女なるのんふまりをそのとも

ぬりつをゐんやうにそおかしかやう
のさくひハ我とハ川くるまたてハ人のよみ
すてたることはこも我ひろふてそれさ面をま
たふくりれまいくゐるか霧さひて風ふ
あてんのおくあるまれそこ月のあと明うを
れ多くれ書れふるけとなくはくしれ殊ハ
くよあれ時とそあまふてくひともなれを
念もなさことくせとも也とそやつふまれふめ
ふあるハ又覚来なくんこりてら面んと
すゐるとよけてにそもつくもえんとも

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

たゝいぬ無心所着になりぬハ風情ハみつゝの
歌にて幽玄体さらにひとへにあしく侍をは達磨と
云て侍れとくいひつゝけし同云大かたの趣ハとかく
心えく侍りぬるハ幽玄とかいふらん詩歌にハ
みえて一説いつれとしもたつねかたく
侍るこそはやうとうも語のかゝれんといふ著云
すへて云のすゝしハ色にくき事にこそ
よみ紀ハ侍すん有るれにもかほことゝもよ
とよりてことゝ悔りのもとも（にイ）釈しなまとし染ふ
まゐらくハ幽しか（か）よりけしたることろしハのんや

幽玄の躰まつ最くとさくより風とひあへし
あつゝゝもくはね尤て能まを心かくやへ
しこゝも哲目之躰てよく体ものふ寄る
くその中にこれり哲もせさハ詞の字そことさふ
あつ成まの餘情深まで心ぬそて哲るほく
くうれもたそつのま他のくゝ云葉にても艶とは
まのぬまも尤て德たでとつの夜ぞぞれる
にそゝたてくハ秋の夕暮九字の中に節く
いつまてもくれぬ朝りのくふぬるお
みりへしこゝも哲目之躰とすゝろに微のと

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

うかゝしく侍ましゝ又させる風情もなけまして
たゞはよく作ゝかつまいとのつゝ姿よかさ
なまして其の風とをすするまゝもあるかへし
其工臣の哥
詩なく風の入江の漢風よおかな波よる秋風雪
是もたるのね浮文に侍へしそこしよ紀詞
と作ゝをたまてゝわさとゝかゝめたる様なる
梨ぬるとは又失ゝすへしあるかへ（後成）うゝこふ
月さ移る雲れらつふ夏ぬりふくるゝ玉河の里
ゝまゝ石ゝ石とゝろるかへのよ紀石とゝえと

たゝくちいさ紀石ゝ紀とりあつめて見て
そくゝ作しあのを作しそてたまていふも
風ことのおもさかるかゝ石ゝとゝれるやうに
わさと忘たるゝ失ゝまして侍なり又三臣房の
手のゝ
白やとみゆるにたるし三吉のゝ山の都鳥かも
これうれよ紀分の年とゝおもし侍ましさ移る
秀句もおくかされるゝとゝくもなけまてゝすゝ
うれのしくさゝけよいひくゝしてそけたる
くゝとしろさゝれうたゝへ白さゝ久れこゝな

ふにはれひもれをまてこも元多にすくれる
あるこしよろ川乃てはくまるそかしこ
築のあえ(いイ)てすき海しさも也古の神はやすき
やうにくさはめてかくしひこしもたるひ
すはあやしのおしまはふなりぬへしいつれも
さるひにいらすしてよこいてかくはさ海なり
心あるん人にこをやの川の國は難波さうの素はし(さと)
是はくしめは歌乃やうにかきりはくとしろ
くれとはあらねといふに深くたくやうはりたゝへ
よく能書はけるさ(かなのイ)しなしのことしはをるてん

をくらへ筆をぬるへふ所もなけまてたゝこと(やすらかに)
深くふにくさうもたへたるはり又云
思ひかね妹なるまゆきは冬夜の河風さむこ千鳥侍也
古の歌のうりはもかけあるたるひはなし六月
は廿六日寛筭より日もおまてをたま詠すれ
よ此世くはるこそあるへは中侍し大かたい
うはるに詞なれとわさしこそ此ゆやう
ふこゆるは歌まさるまて失てすへし只むす
よぬ堂は梢そめぬ野へ乃草葉素はり
川をて都のことあらのもとくとのつ。

つまは名所をとゝかれ故実ある国々の歌枕をすゝ意
たゞすゝかなかまてゝ其の夢のことにたゞかひて
よむつき所のある也今の山水を作るより
松をうへつき所をいふ我さて池をかりて水をよ
ま次つき地をは山をつき眺望をなすまとく
うれ所の名まよりて歌のすゝこをかき新へし
たまてゝいふさ口傳なりまし前の姿と名
所とかけあのことなりぬまては事たゞひたるやう
もていとしき風情あまことやふれてきこゆる也
名所のこゝみてやこゝかん萬葉や西の山の岩の白を

照射するみやまる原の下露に都すの名かけくまゝ紫
東路を朝立くれはかつしかやまのゝ清きのし霧ひたれり
夕されは野人の秋風身にしてて鶴なく物の深草の里
たしめの夢の姿をよけまとしろ々れまたる海の山
ことにかすひてきこゝ也とこゝしの夢こゝ紫清らひやしき
々れたこゝやきるのゝにおもひよ結る東路若歌
まり物くおりふ所ある神なまはかつしかまれ
つきのしはもしをも秋風のうこゝものさひし
きすゝこなかにより深草のさとことにあまより
ありまこ結ひにくくへし

つねは古歌をとりこしてやさしき歌の中に
をかしき詞の哥に立まじりてこそかざりとするにてべき
それのみてはこゝろへきたらぬ事へるへし
定家卿之
夜ふる秋なるへしと玉笹根みだれて落る隅田川の水
これらの類すかたあれと古歌をとらねと書をとひとつ
の哥定をもつらも古のまてよし紀あるきし詞をもうゝ見ん
まうにみゆるにかりそくあやしもふ法もをる
くらかりしをいふ也ゆゑにあるをのよるへしなり
めのしたるのいはやうし又よる所にありて古を
たまれ侍るとうそへかゝすふにてかくかくらへらる

詞のおかしく聞えぬ事ゝと見んかため也
あまた人の眺めしら雪ぬ雲ぞ降くるといへとも
見て月夜前に水もしらまゝよこ夜の紅葉くるもと
よあるまゝと是そ也との事とみよ侍る哥なる
一 おもきまんといふは猶ぬきをみくまの神よ哥せ
まさし歌やうにすへん躰なるとて人やせしもの又
法家の法哥合ふ備の兼とよき侍し
くまかんと侍るや残し古月の定家に是にそ侍也
此歌はことにやかしとそかゝかはゝれ侍りて定家朝
臣也のまとく雑をうけさし素性の歌をかゝり

かまこ当こ世かゝり侍ましかゝるに我ほくにをる
ましいはそれ当をとゝ知るへて上乃当殿下になし
れとはくるまあしためたるこそよけまこ続き
をもとのをとさ所すてむ孫乃当とむすひ当
はかりかゝまつるは難しすへしとあん侍し

一 古人云かゝるさは事ニ序ハ古ことを本とす
屬し日記ハ大鏡乃ことはるをとなるひ和歌の
ことはし伊勢物語なるひ其後撰の哥れことん
をまゝの姫物語ハ源氏にし通たるものなし
みなおまつくとおもつくかくへさ也いつまでも

いゆまつもかまつくゆふことくとからしゆきする也
心乃をとゝふかさりハいかもやつまをかさそちの
夜なる紀所をとハまふまてかく世稱其とりそゆ
は孫をはかゝる字入教のみ字れ示紀ふくさ
なしとハみなすてしかく也万葉集にしハ形夜
をはさしとかけるまを古今序にしハ土佐撰をハさ
せしかく書まつしみふそれ絶なり又ことくのる
さりをもとめて對をこ乃こかくへかゝすわつる
ふよるまゝ紀所くかり紀かくなり對をさけく
示紀法まつはかれまてかくふくあらすさ云

ふて能名のかゝはあらすこれはまろさ時の
ことなりか乃古今の序に歌になく鶯水に
すむかわつなとやうにえ作らぬ所よりとこの
清り殿いろへとるこのめてそ給ふことん乃
何のくとのふとすの孫のなり給日ともて
極るこさのいそ給てとともいそのことぬりぬるな
吟いまやうれるかこと給あるひそふるさ給と
里あるひ又めつしこさ給ふくみなるやう
てしとも里れとへし勝命云かなにものかくて
ゑて清輔いとし給上手也中にも和度の新供

乃日給いとおのしくかきり花のもとに歌のまと
らうと給ふ里かさのもとに柿乃本の新とかく
なりとあるなれとこれ是花かなれそ（おもむきイ）ハ
かくのことくこれをかくへさ給り

一 なとの名はあまたこの里範綱入道のいひ給る
とてぬ人乃かくりしはとるをされみ作らら浪
（古今一字闕一本云うれてうつらく風なるしといふ一本云うれてうつらく風なるしといふ）
いふみか小浪なりといひ給り給ふとしる
伊勢といへ日のさそいへ作る里かり事ハその
ふものうれ所てしまりていふことにて侍ふや家
なとにそいとも見とまひ侍ふす影昭ふとひ

伝しかくはるゝさくれこれはら浪といふことなり
志まみるちいさ紀浪の名なり志とくの度略
な後の時まさしくうれて志まをとりゆへしと
中伝しと同しの志るゝとゝ所まかなふなの
所事の後いてまかなり伝しは同しにより
て南北ゝ大隅薩摩の所をいふ後は國と
ふや志またりおもてれかみなすと有そこふ
は四月五月にくあらそれ浪あらて志つまる
まもれし四月ふるつとらうるみといひ五月
ふたつをはされこそまん中伝といひさう同

さ月といふゆへまやいと無ある事なり
一あるか人云あさるまといひ以さりといふは同事也
こ後まさりてあしたまするかとあさりとる
後まゆゆへよ後るとはいさり然いつり志まと
あつさの河ゝ此時也云ゝ海ことふこれも無
河ゝことなり
一ある人云楠為仲こちはくふのなにくくり
くる時(まイ)五月五日家ことふ志(まイ)も後のさにふさけ
まはあやしこて是とさふそれ所の度なこ
の國まは昔よりとる昌蒲あくといふこと

たとへす經ゝくと故中将於ゝちれ清よ紀ゝへ
そあやめぬくものと思て申けるを侍りたれは
此の國にはさやうの物なしと申けれはその時
けるにあさかの沼の花かつみといふ物あり
それをふけと仰られしより今かくかつみをふく
事とはいひける中将といふは実方朝臣也
陸奥の為仲陸奥守にてくたりける時宮城
野の萩をほりとりて長櫃十二合に入てのほりく
のほりける都まて營するつきはをもけはれて
京へいりける日は殿上人白河邊まて二條大路に
車ともたてゝゆゝしく見んとするものかりこゆゝしきことのひて
ありけるとそ
一 左衛門尉くらん人頼實はいみしきすき物にて
和歌にふかく好して五年かいのちを
たてまつらん秀哥よませ給へとすみよしに
いのりやけり其後いく年へて後病をうけて
けるに命をかけて祈りしに家
ありける女子住吉の明神つきて語て
祈やし事とはさゝやきし人の哥の
木葉散宿はきゝわく事そなき時雨する夜も時雨

をぬよりもといつる秀鎮よりもしハ此ら信を
いたして我ふ心ゆし中しあるりされハ此度ハ
以ゆるもいく面しきおとし彼御かり
一あるふ人いくく業平朝臣二條の后のいまこ
こ人まておりしよしける時ぬしみとりてゆき
事れをせうと云ちよ云かへされ云るよし
いつ里志のこと又日本記にあ字ことのさ面を
かの物のうりふい無るかことくなるふとりてう
さひ云へしまる時をうとたらそれいさとを
里やこかくてありひうの事とうしをとり

事かりたる時と云ちためふ見よかしぬことな
まほ人も志しすふ心ゆとつ見れて思ひて通ら
ふに業平朝臣髮をおぬさんとて志ら里
みたりけるほとふ穷桃と見えんとてまた紀
りことよせてあつまの事へ行きりみられく
ふていこまくやそしゆといふところにや
とうしたる里ける東野中に哥の上志ゆを
添す所一所あり
秋風の事くにつきて見あるかし
こいまあやしくおもしてこ意をうつ清く

是とおもしるふ法ゝ人なしまゝ死人のかゝへ
はゝつありけるかあさ粉志もとゝるふの此
こゝろ此めのあるより法ゝ一ゝ是ひいて
ゝありけるに風まれひくとゝのかく想る是を
詫しあやしくてあるゝ此人は志の事とふ
けるに人是とかゝるに小聖小所このくゝくゝり
て志の前ましていのらおりぬするからかの
かゝへこれなりとゝふ志ゝ小業平あく詫り
ゝるしくおもしくれ此ゝ滅とゝ法へて下此旨と
なのとはいましすゝ此ひ是なり

と此法もゝ此ゝ此聖とは玉造のとのといひ々
ありしを待るゝ事ゝ行くるものこまちと小野小所と
おもしく人もあらぬ物ゝ人ゝ覚朱なさこ
ゝふゆてあらそひ待しとゝ人のかゝり待
し物也

一 ある人云何なる歌合は五月雨は哥にこやの
ここ稱もう此ぬべきかなとよみたりしのあ
ゝ名と清輔朝臣判者にて此ゝ稱とゝ
却ゝよかゝ寸とゝ事まけまなると此みちの情士
なまはこゝも志のこと心をとり見れんせゝ歟

後撰下

竹をくよとこ孫のをし嘗れなく春ゆゑは朝いをも見
こよをゆり此分は春ほとけるまやとこの頭と
けるかこ川面れしすべく和哥の旅とれ
さはなりそれゆへは哥れなるひ世ほ志こうひて
そらひるすかこ賞することとあり志るあ
詩は古集の頭とてみかめてたしとあふくへ
ふくれこれ古集をうろしむるにはなるあ
時の風のことれるゆへなり雅ほは古集の
中にさはしれ姿同一編なるすうれ中にと

孫世の風ほかるすひ清る紙見えるひて本し
してこうれ千年をなるひ糸門は千言葉を
ぬまむへされ学かの後撰の言こ此ころなる
其撰集に入面くもあらす先頭と嘗せさ
れは哥れ春ほされる矣なり杉ゆるもの秀
逸ほあらされは是とゆるけと次ふよとこ孫は
をしといひあさいせる詩をとつる志こくよろ
しかしすさ志るれとかのよとこ孫といつるは
高々な紀言葉をとりて初よの字と略して
此こ孫といつる面こと川こ（こやうなるイ）なきことはなり

是と後撰の銭をかりてえらみ名とおもふつゝ
たよくこれみちふかくの紀なり
應永廿八年初秋上旬ニ書寫之畢

印本云
元亀三年五月十八日於久我殿

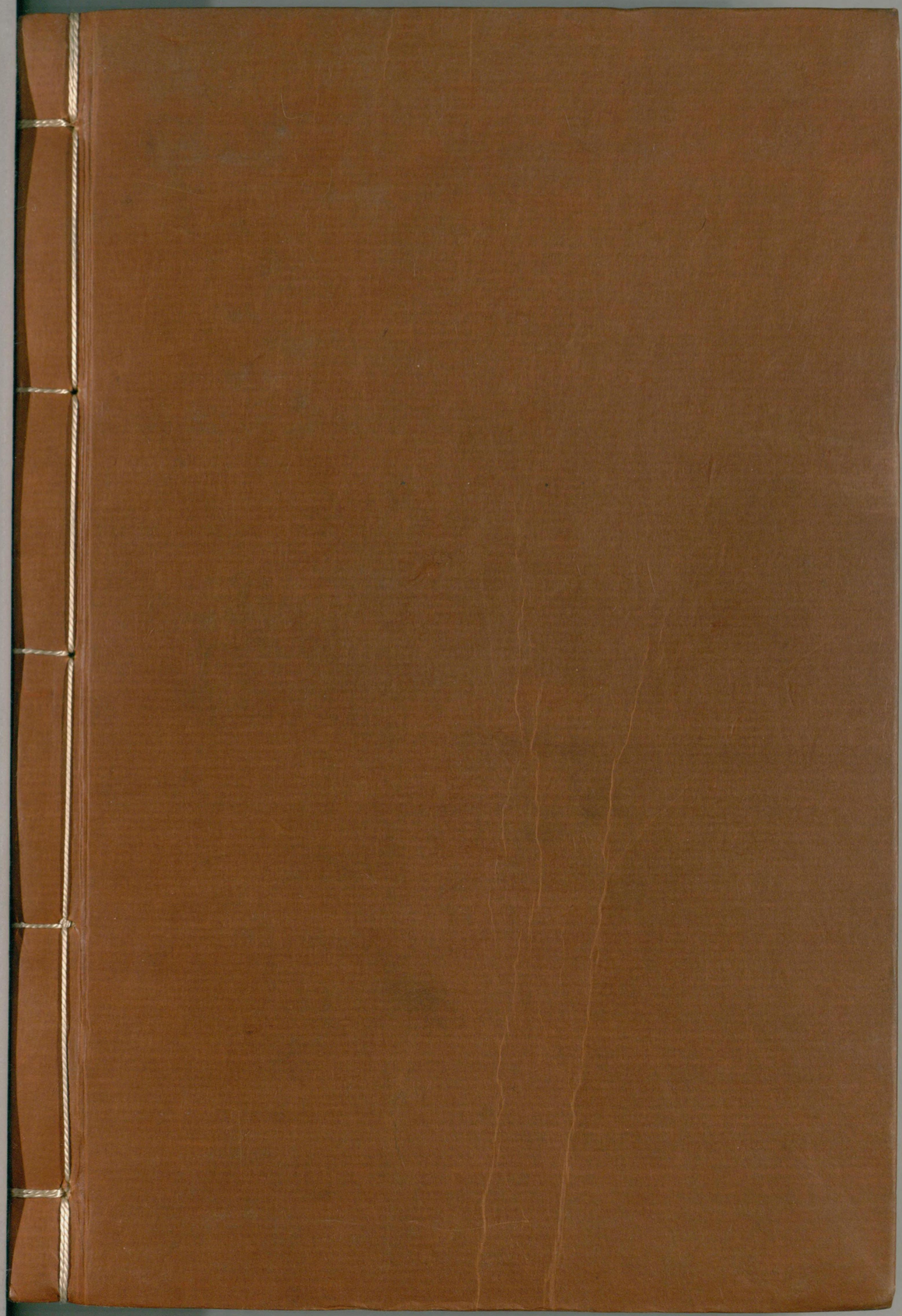
右無名抄上下二巻以屋代弘賢藏新寫應永本抄之本書寫以古寫本及流布印本校合畢

群書類從巻第二百九十四下

127
1

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用